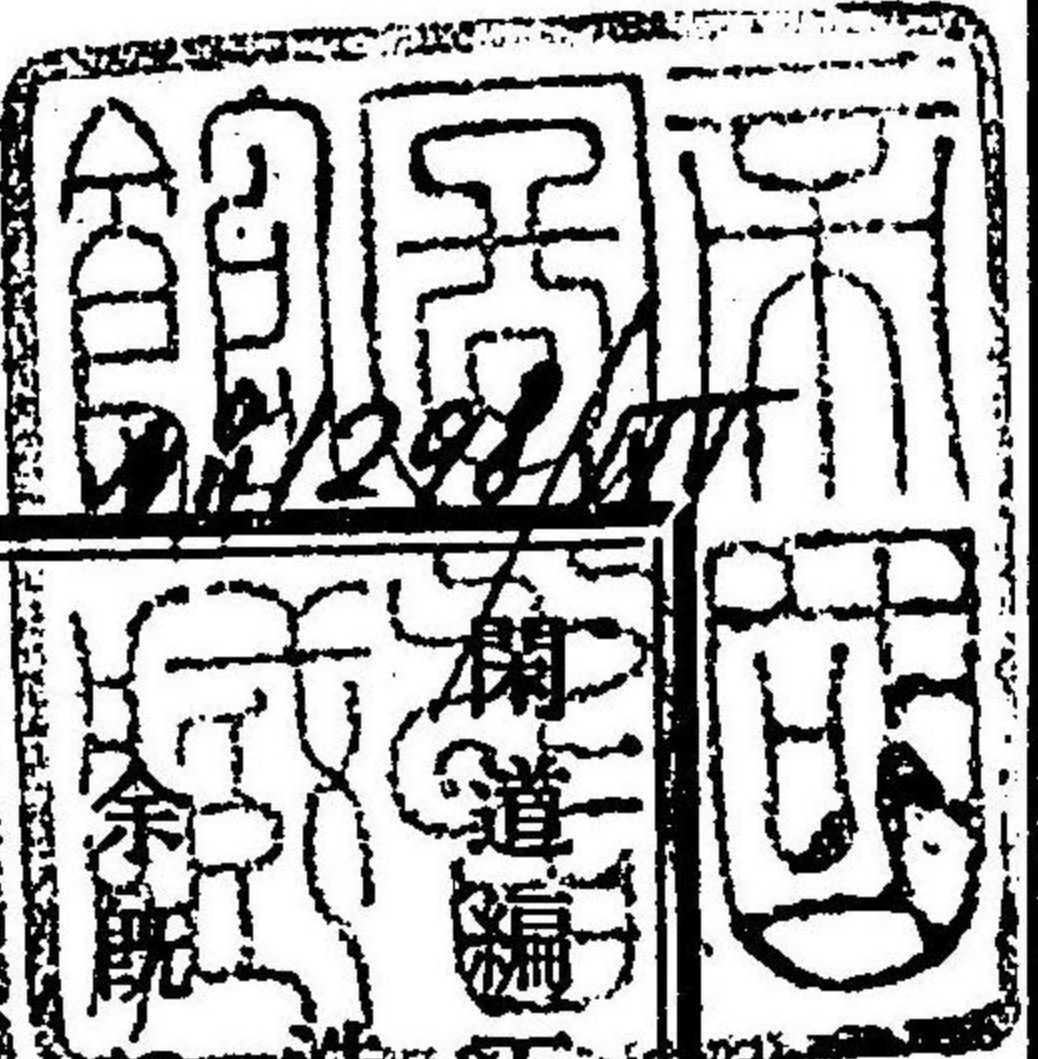


關道編下

館書圖京東

= 31.25

冊號架函類門



開道編下

洙泗教學解 退食閑話附錄

余既に退食閑話を草す因て又再思するに弘道館中に聖廟

を設て諸生の瞻仰する所とせらる諸生たらんもの孔門教

學の法を知らずんはあるへからず孔門の教學を知んとな

らば博く求るにも及はず一部の論語中に備れり論語の一

篇教學の義に關らざるものなしといへとも中に就て教學

に至要なる語を抄出して條列するを左の如し

子曰學而時習之不亦說乎有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不

愠不亦君子乎

是開卷の第一章にして論語一部の惣括なり論語の書は學
て君子となるを云たる書なり故に此章首に學而と云尾



に不亦君子乎と云なり君子とは有位の人を稱する詞なり
依て人品端正にして人の上に立へき徳ある人を指てまた
君子と云なり古は實行を先とする故君子不器と云る如く
一技一藝の末を後にして君子の徳行を本とすること學問
の要務なり扱又學問と云に古と後世との同異あること知
へし後世の講釋をし少年の時より精微の理を説き詩文を
作り博物多識にして何事を問はるゝとも辨説滞りなきや
うなるを學問といふかくの如きとも學問中の一端なれ
ども是を學問の能事とせば孔門の教學とは大なる相違な
り孔門の四教は文行忠信の四ツなり文とは詩書六藝にし
て夫子の雅言は詩書執禮と云るか如き即ち是なり顔淵の
才徳といへども夫子の教は是に過ぎず故に顔淵も自ら稱

して博我以文約我以禮といふ是皆日用に片時も離れかた
く實事に切要なるものにして後世空言を以て教とするか
如きに非ず行とは一身の行にして君父に事へ夫婦兄弟朋
友の交りに其道を盡す實事にして空言に非ず忠とは中心
と書たる字にて人の爲に謀慮するを盡く中心より發して
かりそめにもうはのそらなるをなきをいふ信といふ人に對
して云ふその爲すは一毫の虚偽なく始終變違せざるをい
ふ行は動止語默皆其身の行ふ所にして忠信は其心術なり
行跡は心術を本とする故心術を別に一條とせられたり依
て孔門にては主忠信とて是を以て一心の主として萬事の
根本とす主忠信の義貝原氏の論する所詳なり此四教は何れも實事を實行に施す
の道にして後世理を言ふことを先にして言論を以て教と

するとは天地懸隔す然は論語を讀むもの孔門の四教を知
て後に學而の二字始て明了なるへし

有子曰其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣不好犯上而好作乱者未
之有也君子務本々立而道生孝弟也者其爲仁之本與

首章の次に此章を載せたるは首章は論語の總括を明し是
に繼に此章を以てす夫子の道は仁にある故に總括の次に
は第一に爲仁の章を載たり爲仁の本は孝弟にあり孝弟を仁
の本と云
へからすとの説もあれども仁の本と云も
不可あるとなし余別に説わり此に贅せず孩提にして親を愛し長し
て兄を敬す是を推廣して天下に達するは仁なり故に孔門
の教は孝弟を先とす其本立つ時は仁の道是よりして滋生
す孝弟よりして仁に至るは即ち前章の君子なり兩章相須
ちて其義始て明なり

子曰巧言令色鮮矣仁

此章仁の誠偽を云前章の孝弟より出たる仁は中心より發
し本ありて誠の仁なり言貌のみにて仁の眞似をするは色
取仁而行違ふといふものにして偽れる仁なり故に外貌を
飾るものには仁者はなきとの義なり孔門の教に忠信を主
とするは相反するものなる故孝弟爲仁の次に此章を載て
學者の戒とするなり

曾子曰吾日三省吾身爲人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳不
習乎

此章忠信を云即ち四教中の二ツ也人の爲に謀慮するにあ
りて中心より發し朋友の交に虚偽なきは前章言貌を務る
ものと相反す習ざるを傳ふと云は此上の二句と句法異なり不習
を傳ふと讀へし別に説あり

習ふとは詩書六藝の文を習を云行と云は人に對し物に接する時に當て其事によりて其宜きを制し忠信も人と交る間に當て其事あり平素忠信を心には掛れ共其事あるに臨て行事に發するものなれば事もなき日に豫め其業を受け習熟すへき物に非ず文は藝なれば平素業を受け習熟するに非れば事に臨て用をなさず故に習と云は文を習ふなり是を習熟して自信する程ならば人にも傳へし我身にさへ習熟せざることを物知り顔に人に傳るは道聽塗説にして實は中心にも忤ることなるを厚顔にして人に傳るは忠信に非故に曾子の是を省る所は皆言貌を務るものと相反するなり

子曰道千乘之國。故事而信。節用而愛人。使民以時。

前の三章を合せ見る時は道の本末行の誠偽明白なり此の章に至て始て治國の道を論ず孔門の學は仁なり仁は己を脩め人を治るの道なり曾子の三省は脩己の道なり次に治人の道を論ず敬事とは施行する所の事を疎畧にせず大切に取計ふを云大切と思ふには私見を執らず俗論に牽れず財利に惑はず比例に泥まらず古に稽へ今に徴して疑ひなく聖賢の大道に合ふへしと見定たる所を以て取計ふは事を敬するの至りなり信は四教の一にして人に對して片時も離へからず臣民に令するとも反汗なきか如く必信を以てすへきとなれとも始に疎略にして定見なく苟且姑息の令を下す時は道に合はさると多き故他日行支へありて信を失ふに至るなり然は信を立んとならは始に事を敬すへし

となり愛人は仁なりされども節用の道を知らず財を用るに制度なければ用度不足して必民を苦しむるに至る故に人を愛せんには必用を節すへしとなり此句は民財を奪さるの本次の句は民力を奪さるを云民をして財力瞻足せしむるは仁政の要なり民を農隙に使ふへきは人の知る所なりされども人君の侈心にて農時を顧さるもの多し民を使ふへき筋にて使ふにすら農時を妨げず況んや其筋なき事には農隙なりとも妄に民力を勞せさるは勿論なり以上の三ツの者は論語中政を云の始にして聖人の深意ある所なれば讀者深く翫味すへし世人或は不在其位不謀其政と云事を誤會して士は槍太刀を執て働く事職分なれば治國の道は不知して可なりと云ものあり是論語を知らざるなり

論語中顔淵を始として君にも仕へず政事をも驗さるもの一邦を治るを問ひ政を問ふを多し是道を學ぶもの政治の得失をも知るへきを明けし今人は士の位に在りながら己か位を知らず四民の中にも農工商の位は力を勞して人を養ひ人に治らる士太夫の位は心を勞して人を治め人に養はる士は賤しといへども君の祿を食む其君の民より收納せる祿を受けて人に養はれながら人を治る道を不知は其職を失ふと云へし孝經にも君の美をは將順し其惡をは匡救するを事君の道とす然るに臣たるもの政治の道を知されぬ君の美惡も不知何を以か將順匡救せんや縱令一介の武夫なりとも政禮を知されは人と交るに其忠邪も辨せず君の善政を譏るものあれば却て理ありとおもひ是に附

和して善政の妨げとなり小人國を乱るもの有とも惡むを
を不知相親み相交れば善人とは疎遠になり小人の勢を助
長す是國に忠ありと云へからず本より不忠の心はなけれ
とも政禮を知らざるよりして我身の不忠に陷るをも知ら
ず然は君の祿を食む者は一介の武夫も政治の大體を知る
へきとに非や故に曲禮にも地廣大にして荒而不治是亦士
之恥也と云世人は土地の荒て治らざるは君大夫の恥との
み思へとも君の祿を食なから土地の治らざるも心付かす
安然として居るは空氣クキと云ものなれば士の恥とは云たる
なり是を以見る時は士より以上の位は政治の得失を不知
しては叶はざる立場なりと知るへし仕るもの學ふもの皆
士なる故論語中に政治の問答甚多し孔門の學は脩己治人

の道を兼教ふ後世學者國家を度外にするか如きに非此章
は政治を云ふの始なる故初學の爲に聊論及するなり
子曰弟子入則孝出則弟謹而信汎愛衆而親仁行有餘力則以學
文。

此章は學て仁を得るの工夫なり孝弟は仁の本なれば孝弟
を以て少壯の者の先務とす信は四教の一にして人に接す
るに尤切要なりとすさて仁を得んとならは孝弟を推廣め
て汎く人を愛するより始る孝弟汎愛を本として仁者に親
み近つきて其薰陶を受へし文行は四教の二なり上の四句
皆行なり本文の四の者を行ひ餘力には文を學へし是孔門
文行の教なり先儒の説に文は末なる故先後する所を知る
と云を後人誤り讀て孝弟等の行脩備したる後に文を學ふ

と云は本文の意に非行は人に接し事に臨たる時の行なり
父母に向ては孝長上に對しては弟の言ふ時は信を以て
する事なれども日夜朝暮の中には父母長上にも對せず
の云はさる、時あり愛衆の心も常にあれども間居獨處の
時もあり仁者を親めども其人に遇さる時もあり是行の餘
力にして朱注に暇日と云か如しとは是なり然は文を學ふ
とも孝弟以下の事を行ひながら其中に餘力はあるとなれ
は暇日と云か如しと注せしなり先に孝弟等の行を脩備し
其後に文を學ふと云には非父母に事へながら文をも學て
身を立て道を行んとするも孝なり日夜朝暮父母の側にの
み居て文をも學はす君に事へん時に至りても用をなすと
あたはさらんには父母の心にも安しと思ふへからす是也

九孝と云かたし讀むもの先後の字に泥むへからす

子夏曰賢賢易色事父母能竭其力事君能致其身與朋友交言而
有信雖曰未學吾必謂之學矣

賢賢は即ち親仁と同意なり父母に力を盡すは入孝に同じ
事君は前章になけれども皆行なり朋友信は謹信と同じ四
教の一なり信あるものは忠も其中に備るへし賢を賢とす
れは自ら文をも知得へし是四教を學ひ得たるなれば學た
る人と云へきなり

子曰君子不重則不威學則不固主忠信無友不如己者過則勿憚
改

四教の目は前の諸章に散見す此に至て主忠信と云是忠信
は文行の本なり故に是を一身万事の主とするを一家に主

人あるか如し文行もまた皆忠信より出るなり君子の威重なるも外貌を以て威重を養ふに非忠信を主として一身に主あれは事に遇て輕躁せず自然に威重なり學て是を博むるに文を以てすれば万事に通達して偏固ならず固字古註に益從ふへし友を擇ひ過を知て能く改れば自然に固蔽を免るへし前の數章より此章に至て主忠信と學則不固との義を明にす孔門教學の法を見つへし

有子曰禮之用和爲貴先王之道斯爲美小大由之有所不行知和而和不以禮節之亦不可行也

此章禮の和を論ず禮は六藝の一にして文なり

有子曰信近於義言可復也恭近於禮遠恥辱也因不失其親亦可宗也

義を知るは詩書を學ふにあり古人も詩書は義の府と云是なり詩書も禮も皆文なり

子曰君子食無求飽居無求安敏於事而慎於言就有道而正焉可謂好學也

敏事また敏行とも云四教の行なり有道は道を學ひ得たる人なり道は詩書禮樂の中に存す故に古は道藝と並稱す是文なり文行は四教の二なり次章に子貢を可與言詩とのたまへるもまた文なり子夏をもまた可與言詩とのたまふ是詩の教なり

爲政篇

此篇學而に繼く學ふ所を以て政に施すの意なり學ふ者政を知るへき事前に論す

子曰詩三百一言以蔽之曰思無邪。

此章詩を學ぶの要を云即ち文なり詩は志を云ふ思ふ所より發して邪曲なく其儘に述たるものなれば是を學て人情を知るへし人情世態を知て實事に活用する是詩の教なり

子曰吾十有五而志于學三十而立四十而不惑五十而知天命六十而耳順七十而從心所欲不踰矩。

四教は文行忠信なれとも學と云は多く文を指すなり故に前にも學文と云又博學於文博吾以文とも遊於藝とも云是夫子の幼より志し給ふ所にして修身自ら任し給ふ即天之未喪行也匡人其如予何と仰られ又莫不有文武之道焉不學と云文武の道は詩書禮樂中に存す又信而好古好古敏以

求之の類古を知るは詩書禮樂を學ぶにあり是を以て夫子志學の義を知るへし三十而立と云も禮を學の效多し故に立於禮不學禮無以立とも云り不惑とは孟子の四十不動心と云るか如く本心を動すてなきなり愛しては其生を欲し悪ては其死を欲し或は怒を遷すの類是惑なり故に曾子も喜怒異慮を惑なりと云り夫子に如此とはなけれども聖人自ら省み給は、小く心の動きしと思はるゝ事もありてかくは仰せられしならんか五十而知天命とは命は其人受る所の天命を云道之將行也與命也々々夫斯人也而有斯疾死生有命など皆其人の天命なり夫子魯に用られ東周の志も遂くへかりしに三家の爲に妨られ魯を去り給ひしは五十三歳の時なり五十服官政と云る年齢に當りてかくの如

くなれば天の夫子に命する所當世に施行するを以てするに非るをを知り給ひしなるへしされども鳥獸と羣を同くすへきに非天下を易るの志は熄み給はす且天下の勢も變化窮りなく漢の昭烈が事來無終極と云るか如く人意を以て天命を圖るへきに非多才篇にも桀紂が天命を圖るを罪とす人にしては天を云はす人事を盡すへき事なれば夫子も諸國を經歷して人事は盡されたれども實は天命をは知り給へる也故に儀の封人も天將以夫子爲木鐸と云て夫子の位を失ひ四方に周流して教を行を天意なりとす果して其道後世迄傳り今の世にも天下の摸範となる是即ち夫子受給ふ所の天命なるへし六十而耳順は神氣彌和平にして人言耳に逆はす陳蔡に苦み給ふか如きも綽々として意と

とせられさるならん七十は精神筋力衰て勉力するをあたはず攝養して餘年を終るのみなれハ禮法の外に優游して喪に遭たる時も飲酒食肉するほとなる故萬事心の儘にして檢束せずされども定規を踏み踰るほとこの事をはせさるなり聖人の徳業は本より人の企て及ふ所に非れども平日の事に至ては衆人と同じきものあり此章十五志學より始めて終身の履歷を自ら述給へるを門弟子是を記して學者の規則とす是孔門進學の眼目なりと知るへし

子曰温故而知新可以爲人師矣

故は既往の跡を云夫子の祖述憲章する所堯舜文武の典禮政刑よりして近世の故事比例等に至まで皆既往の轍迹なり温とは冷なるを温めて今の世に施行すへきやうにする

二十
となり知新は近ころの新しき事を知るなり當世行はるゝ
その得失利害を熟知して故事をも参考し其宜きを得るに
非されは學たる事も用をなさず師たるもの故事を知て教
たるのみにしては門人有用の材を成し得ず故に師は故き
事と新しきとを斟酌損益するの道を得て人にも教へきな
りさて温故知新と云も詩書六藝の文を學ぶに非は能くす
へからず博文の教忽かせにすへけむや

子曰。學而不思則罔。思而不學則殆。

詩書六藝の文を學たりとも只其事を覺えたるのみにして
思念を凝して其意義の深遠なると作用の活動あるとを反
復翫味せされは覺たる事も預りものゝ如く我身に受用す
る所なく冒中蒙昧にして知識する所なし又心に思念した

るのみにて文を學はされの一己の私智を以臆度し聖賢の
大道に本つくそあたはず益成括か小く才あれども君子の
大道を聞されは其身を殺すに足れりと孟子も云るか如く
にして至て危殆の事なり故に學而時習之とも云て文を學
て時に重習思念すへき事篇首の第一章に載たり學思の二
字一を廢すへからず

子曰。攻乎異端。斯害也已。

異端の學をするものは其道に深ければ深きに隨て其害益
々深くなるのみにして益はなきなり古の異端は楊墨老莊
等なれども大に人に害あり後世に至ては異端の害益々大
なり聖人の道は天地自然の大道なり天地あれば人倫あり
人倫あれば五典あり是天地の自然に出て、人の造たる道

に非天竺西洋等の教は皆一己の臆度を以此世界の外に地獄極樂などいふものありけに思はるゝとて人意を以推測して造設せしものにて其實はいかにもして生老病死の苦を解脱するともやあると偏に思念を凝したる鄙心より往生といふを考出したるものなれば一己の思念より見出して其實を見たるものは一人もなく臆者の夜中に鬼物を見るに同じ是を天地間に徴して毫髪の證なきをなりかくの如く自然と造設と其端を異にせし故聖人は天を樂み生者の倫理を盡す戎狄は世を厭ひ人倫を捨て死後の往生を願ふ生々と寂滅と有と無と實と空と毎々相反す其害に至ては佛を永劫の倚頼する所とし君父を一時の假合と云是に依て馬子の悖逆あり延曆園城諸寺の

禁闕を犯すあ

り加越には一向の乱あり參河武士の忠義なるすら君に背き奉る西洋夷の如きは己か本尊を大父大君と稱し君父をば小父小君なりとす其教西邊に入て僅に六十年の間に民心を蠱惑して島原の亂には孤城に據て天下の兵を動したり異端の害此に至るへしとは夫子といへとも夢にも知り給ふまじきなり今は洋教を嚴禁せられたれとも洋學といふもの世に行はる海外の風土人情を知り船銃等の利を求るは國家の益もあるへけれども窮理等の僻説を道聽塗説して人心を蠱惑し人をして夷俗を尙慕せしむるに至ては他日邪教の媒となり國家の大害を生せんを必然なり夫子若し今の異端を見たまわんはいかばかりか驚愕あらんと竊に寒心握汗するなり

八佾篇

政は禮を先とす故に爲政に繼て此篇に禮樂を論す是また文を以教たまふなり

子曰夏禮吾能言之杞不足徵也殷禮吾能言之宋不足徵也文獻不足故也足則吾能徵之矣

夏殷の禮を説たまふは四教の文にして温故知新の事なり殷因夏禮章周監於二代章もまた同じ

里仁篇

此篇仁を論す禮樂は仁を行ふの具なり故に八佾に繼く仁は四教の行なり

子曰苟志於仁矣無惡也

古の教は簡易なり後世の如く煩碎なることなく仁を行んと

の志さへあれば自ら惡は生せずとのみ教らる後世は人欲に克つを以仁を求るの法とす存養省察等の名目を立て一身を檢束私欲盡る時は本心著れて仁となると云て身に一疵も存せさらしめんと人心を束縛する故心中狹隘になりて徳知長せず一様に摸なにて押たるか如き人のみ出來て孔門の如くにさまぐの異能の士を生せず史記に十哲の人々と云孔門成徳達材の道を知れりとす孔門にも身を省るとはあれども後世の如く煩苛ならず志を專にして一筋に仁を求るの外に他事なき時は惡念生せずして自然に惡事もなかるへしとのみ教たまへるなり仁と見込たるとは心一はいに行て過ある時は改むれば是また惡事に至らす後世は過なきを好む故畏縮して仁を見れども存分に行はず聖門の教と異なり

子曰富與貴。是人之所欲也。不以其道得之。不處也。貧與賤。是人之所惡也。不以其道得之。不去也。君子去仁。惡乎成名。君子無終食之間違仁。造次必於是。顛沛必於是。

君子去仁。惡乎成名と云るは君子と名つくるは仁あるを以てなり。仁なくしては君子と云へからずとなり。論語の書は學て君子となるへき事。開卷にも見えたり。然は君子となるは仁にあり。仁の一字。論語一篇の主にして。孔門の四教も仁を行の楷梯なり。

子曰參乎吾道一以貫之。曾子曰唯。子出門人問曰何謂也。曾子曰夫子之道忠恕而已矣。

一以貫之とは仁の一字を以諸徳を貫穿するを云されとも。仁の道至て大なり。仁とのみ言ふ時は曾子の門人は是を行ふ

の方を知り得かたし。故に忠恕を以是に告く。忠は中心より發し。恕は人を視ると己の如くす。是仁を求るの方にして。忠恕兼備り。博く人に及すは仁なり。故に夫子も己欲立而立人。己欲達而達人と云を仁の方と仰られたり。曾子仁と云はすして仁の方を告たるは門人をして諭り易く行ひ易からしめんとなり。忠は四教の一にして。忠信といふ時の恕も其中に備るなり。曾子の聖門の教を深く諭り得たる故。門人に告ると如此。

公冶長篇

此篇多く門人の言行を舉ぐ。門人各々其所長ありて。一様ならざるを見る時は。孔門成徳達材の道知るへし。雍也篇も大抵是に同じ。

孟武伯問子路仁乎子曰不知又問子曰由也千乘之國可使治其賦也不知其仁也求也何如子曰求也千室之邑百乘之家可使爲之宰也不知其仁也赤也何如子曰赤也束帶立於朝可使與賓客言也不知其仁也

此章を見る時は門人に千乗の賦を治る人も有千室百乗の宰とすへき人も有賓客と云へき人も有各々其長する所に隨て有用の材を成す後世一律を以人に教へことくく一様の人物に仕立るとは大に異なり下章にも由也果賜也達求也藝と仰られて其資質は皆異なれども何れも政に従へきことを許し給ふ又子路曾冉有公西華侍坐の章などの類を以て合せ考へは孔門の弟子長する所一様ならざるを見つへし

子在陳曰歸與々々吾黨之小子狂簡斐然成章不知所以裁之夫子成德達材の教德行言語政事文學等の類にして各長する所に隨て實材を成就したまふ其人は一様ならざる中にも中行の士を貴ふは勿論なれども中行は得難き故不得中行而與之必也狂狷乎狂者進取狷者有所不爲也と仰らる狂者は志大にして流俗に染す古人の言行を進取して是を尙友す共に道に進へき人なり狷者は其次にして大志はなけれども恥を知て非義を爲さず世に諂はす道を守るものなり是躬行は潔白なれども進取の志なく教を受るの益少し故に夫子は狂簡の士を教育せんと欲す簡は大まかにして小節に拘らす世俗の目には傲慢のやうに見ゆれども聖賢は瑣屑を好まずして寛大を貴ふ夫子の子桑伯子を南面し

て可なりと仰られしも簡の一字にあり臯陶は元首の叢脞を戒め舜の語にも簡而無傲と云臯陶も簡而廉と云易にも易簡而天下之理得矣とも易簡之善配至徳とも云聖賢の簡を貴ふこと見つへしされとも簡の失は傲に流れ廉を失ふことあり故に無傲とも而廉とも云て戒とす即ち居敬而行簡と云るに同じ狂も志大にして進取るは善なれとも志行相掩はさるの失あり故に夫子是を裁正して廉にして傲らす敬簡を兼志行相掩はしめたまは、中行に進へし斐然成章とは博文の教に従ひ粗其業を習得たるなりされとも約禮の功未だ至さる所ある故夫子の裁正を得て博約兼備りたらんには志行相掩ひ學問事業一途になり實に有用の材となるへし又郷原キヤウは是に異にしてさせる悪事もなし得す

志行もなく世人の鼻息を仰き身構へして刺りを受さる様に立廻り俗眼には中行と見えて君子の中行と混亂す無徳にして有徳に似たり實徳と紛らはしき故徳の賊と仰らる然は郷原を惡み狂簡を教導するを聖門の教法後世小廉曲謹を務て狂簡を輕蔑し或は毀惡して郷原を惡むを知らざるものと大に異なり

子謂子夏曰。女爲君子儒。無爲小人儒。

古は儒と云は道藝を以て人に教る者を指して云なり夫子の道行れず門弟子教授を以身を終るもの多かりし故世人は孔門の人を儒者と稱せしよりして後世は夫子の道をも儒者の道と云ふにはなりたれとも夫子の時に當りては儒者と云ふはなかりしなり子夏は文學に長したる故儒と

なりて教授をすへしと仰られたるなりさて儒とならんには君子の儒となるへしと教へ給ふ六藝は藝なれども道を行へきための藝なる故藝に道を寓して教とす是を道藝と云もし道を離れて藝のみ學ふ時は技藝の士となりて君子の道藝に非即ち樂記に徳成而上藝成而下と云る是なり然は子夏も君子の儒となりて道德を本として人に教ふへし學ふものをして技藝の小人たらしむへからすと仰れしなり

子曰君子博學於文約之以禮亦可以弗畔矣夫。

聖門の四教は文行忠信にして教るには此四者なれども行と忠信とは人々自ら脩る所なれば行住坐臥己か心を盡すにありて一々に人に問ふことあたわす人に就て學ふもの

は文なり詩書六藝の文は人に就て學ふに非れば自ら知ることあたわす又學ひ得る所博からされは固陋にして万事に通達せず禮は百行の儀則にして動靜語默盡く禮に由らされは其宜きを得へからす文を博く學たりとも文のみにては汎然として準的なし故に文はいかにも博くして是を取締めて約にするには禮を以てするなり禮も文の一ツなれども文の中にも禮は至て行事に切實なる故文と禮と並へ云ふ禮の奢徳と喪の萬歳とを並へ云たるに同じこの博約の教は孔門の至要とする所に在て顔淵の才徳あるも教法は是に過ぎず顔淵の稱歎せるもまた博約の一事なり學者是を輕忽にすへからす。

子貢曰如有博施於民而能濟衆何如可謂仁乎子曰何事於仁必

也聖乎堯舜其猶病諸。夫仁者已欲立而立人。已欲達而達人。能近取譬。可謂仁之方也已。

博施濟衆は仁の極切にして堯舜の聖といへとも是を難しとす子貢は行ふ事あたはさる故夫子は其人の手近く身に行ふへき所を舉て仁をする方を以て是に告給ふ仁者の忠恕をよく行ひ得て其功人に及ふを以て仁とす立とは身の行を立て屈撓せさるなり達とは志の如くに行れて届き合ふとなり已か心に立んと欲し達せんと欲すれば人もかくあらんと思て已か欲する所を人に施す近く已か心を譬として人にも推及すは是仁を求るの方なり聖人の教高遠に馳せず各く其人の能く行ふへき所を以て導き給ふことかくの如し

述而篇

此篇及び泰伯篇多く夫子の志行を記す門人の言行さまくなれとも夫子の志行を以て準則とすへきなり

子曰述而不作信而好古竊比於我老彭。

夫子の聖といへとも位を得ず故に禮樂を作らず堯舜を祖述し文武を憲章して古の道を述るのみ古の聖人を信して疑はず中心より古を好む至誠より發す後世古の道をは學ひながら片心には今の世には行かたしなど、思ひ又聖語の外に種々の名目を造作して人に教るも實は古を信せず聖語に通曉せざる所ある故なれば即ち不知而作之と云るなり聖人不知して作る我無是也と仰られて篤く古を信し文を學て古の道を求め禮樂の淵源を窮め給ふ皆古を信

するの篤きによりて集て大成する事を得給ひしなり故に
下章にも好古敏以求之者也また篤信好學と仰らる聖人の
學術は後世まで學者の摸範なり

子曰。默而識之。學而不厭。誨人不倦。何有於我哉。

前聖大道の要制作の美意義廣大深長にして言語にも述か
たき事あり聖人文を學て深く思念を凝し胸中に藏蓄して
反復翫味し又默識せる其外にも博く學て日知其所亡月無
忘其所能と云へるか如く舊聞は日々熟し新得は日々に新
にして道に進み不盡の樂有て厭ふとなく既に學ひ得る所
は已欲立而立人とあるか如く人にも誨るか恕なり人に施
すと中心より發して倦怠せざるは忠なり夫子の學ひ誨給
ふと自ら任とせらるゝ所なればまた若聖與仁則吾豈敢抑

爲之不厭。誨人不倦。又自行束脩以上。吾未嘗無誨
焉。と云るも誨而不倦の義なり謙遜して聖と仁とは敢てせ
ずとは仰られたれども忠恕の至りは即ち仁なり夫子の仁
聖なるも教學の二にありと知るへし

子曰。德之不脩。學之不講。聞義不能徙。不善不能改。是吾憂也。

徳は身に備りたるものなる故學と云はすして修と云固有
のものを修治するの義なり學は文を學ふとなれば講究の
力によりて博學審問慎思明辯して後に闡明なるへし義に
徙り不善を改るも脩徳の事なれども詩書禮樂を學はされ
は義に明ならずして不善あれども自ら知らず故に學の功
を大なりとす是文行の二ツ相離れざるなり

子曰。志於道。據於徳。依於仁。游於藝。

諸善の行に施すものを道と云其善の人身に備はる所を指
て徳と云諸善の長にして諸徳を統るものを仁と云學ふも
の第一に志を立て道を學ひ得て實行に施さんと心に思こ
ひなり道を行ふには身に備りたる固有の徳を失さるやう
に執り守るなり據とは押へつめて手離さるを云道と徳と
を統て善の長となるは仁にして諸徳の眼目なれば何事も
仁を表準として身に離れさるやうにするなり依とは衣服
を打着て手足に纏ひ身體に愜ひて便安なるか如きを云仁
を服行して身に安するなり行と忠信と皆仁の中に備るな
り藝は詩書六藝を學ふには理窟つめに束縛しては才氣伸
ひ難し藝の中に身を打はめ遊所とし從容不迫にして我身
にも覺へず自然に習熟す是孔門博約の教法にして文行忠

信の四教を離れさるなり

子曰不憤不啓不悱不發舉一隅不以三隅反則不復也

前にも學而不思則罔と云るか如く學たるのみにて已か心
に深く思念せされは學たるとも中心まで染みこますして
其用をなさす故に夫子の人を教給ふにも其人憤勵して學
ふ所の意義に通せずしては残念なりと自ら憤る程にあら
されはいかなる事を言聞せたりとも耳に聞たるのみにて
心に染ます實に開通するにあたはさる故夫子も其まゝに
さし置て強て發き給はず又其人心に會得しやうにて口に
言んと欲すれども言ふにあたわすと苦心する程に至らさ
れば教を受へき下地なく率爾に誨言を聞たりとも深意を
悟りかたき故姑く其進むを待て俄に啓き給はず心に感發

四十一
する事あるを待るゝは聖人の寛大なる所にして舜の言に
も五教を敷く事寛に在れとて人を教るの要は寛の一字に
過ぎず故に學記にも時觀而弗語存其心也とも又道而弗牽
則和強而弗仰則易開而弗達則思とも云て其人をして自ら
思て憤悱の心を生せしめ開悟すへき下地の出來たるを見
て啓發するなりまた一隅を舉て示給は、是に本つき自ら
反復思繹して其餘意を推廣め未だ聞さる所の三隅をも尋
ね求るに非れば耳に聞て心に悟らず學ふと雖とも耳學と
なり死物にして活用を知らず重て告るも無益なれば再ひ
告給はす人をして自ら思はしむる故おのつから心を用る
事も深くなる道理なり孟子の引而不發躍如也と云るも此
意なり後世人情偷薄輕佻になり詩書禮樂の意義を自得し

四十二
實事に施すなど云とは迂遠に思ひ學問事業二ツになりて
行ふ所も古を師とせず私意に出て准則なく讀書も表邊に
て口才を働くのみにて聖賢作用の深意を得ることあたは
ず聖門の四教と懸隔す人に教るものも亦皆如此なる故人
材を生せず學記にも今之教者呻其佔畢多其訊言及于千數と
云り所讀の書を紙上にて談するのみにして着實ならず其
憤悱を待たずして是と言論する故さまくの事を問かけ
言聞することも煩數にして一隅を舉て三隅を以て反する
を待とは雲泥の相違なり故に夫子の自ら稱し給ふにも發
憤忘食樂以忘憂不知老之將至と仰られたり是に依て已を
推て人に及ほし給ひ門弟子も如此にして啓發の益を得せ
しめんとすの意にて本文の如くには仰られしなるへし

子曰加我數年五十以學易可以無大過矣。

易の書は陰陽の變を窮め人事の變通を知り時變に應じて活動轉化する人よく活用して實事に施し消息盈虛盡く陰陽の變に應じ天地開闢の道を得る時は事に臨て過舉なかるへしされとも是聖人の奧義にして人々の悟り得へきに非行遠必自邇と云るか如く聖人と雖も手近き所の詩書禮樂を學得て人事の作用に明ならされは初より一足飛に深奥の義理を活用し難し且東周の志專にして夏時殷輅周冕韶舞と仰られしことく四代の禮樂を斟酌損益して當時に施行へき事を専ら講究し給ひし故五十以前などには易を學て沈潜反復すへき餘暇もなかりしなるへし依て今より後數年を増加して五十歳にも至り餘暇も有て易を學ひ陰陽

の變化を推窮せば大過なからんと仰らる加五十並に字の如し蘇紫溪太田錦城このなり然は易を推窮すへきは勿論なれともさし當りては先つ文行忠信を準的として學ふと孔門の先務と知るへし子所雅言詩書執禮皆雅言也

易の書は五十以後の學ふ所と仰られ平日門弟子に告語らるゝには詩書執禮を以てす是四教中の文にして博文約禮の教なり詩は人情を云ふものなれば古今の人情時變に通し君父に事へ邇之事父 誦詩三百授 之以政不達 使命に達し 子路 於四方不能專對 雖多亦奚以爲 是を實事に用ること 詩の教なり 詩以理性情と 云は聖語にななり關雎洋々語魯大師樂謂韶等の如きは雅言し給ふ所なり書は古今の制度文章世變事態善惡是非君臣父子夫婦兄弟朋友の道盡く備り脩己治人の實事に用るは書の教なり

り詩書は義の府なれば是を行事に施して能事畢るやうなれども禮樂は徳の則にして万事其節に中るへきために規則を立置たるものなれば君臣には君臣の禮あり父子には父子の禮あり萬事に付て必禮に由る時は自然に其節を得て道に叶ふなり禮は詩書の如く諷誦言論等を以て學ぶ所に非其身の動靜語黙に就て直に執行ふ所を以教る故執禮と云禮記中有子曾子子游子夏等の問答を見る時は孔門互に執禮を論判せし趣頗る見つへし夫子平常詩書執禮を言説し給ひ性と天道とは門人聞く事を不得後世博文約禮には心も付けず少年より後儒の注解などを見はつりて徒に性命等の理を論ずるものと異なり

子曰二三子以我爲隱乎吾無隱乎爾吾無行而不與二三子者是

丘也

聖人の人を教るは行事を以て是を實踐に施に在て言論を以て容易に深奥の理を説給はす是をして詩を誦して人情を知り書を讀て識見を廣め禮を執り行て日用の行事とす此三ツを告語せられ學者服膺する所ありて憤悱に至らしむ憤悱せされは啓發せず性と天道とは聞てを得す如此なる故言論を以て先とし給はざるを門弟子誤て隠す事ありと思はんかと深慮ありて我爾に隱すに非我教は行事を先とす我常に二三子と共に行ふ所是我教なりと夫子の行事を門人心を用て身に服膺し自得する事あらは耳を提て言説せらるゝよりも其益大なるへし後世言説を先とし初學よりして性命の理などを談論するは聖門の教と異なり

子以四教文行忠信。

文行忠信の四教のことは大意前の諸章の下に論ずるか如し。夫子の教は詩書禮樂の文にして是を博く學ぶに在り文の中にも禮は日用常行の儀則なれば其儀作法を學得たるのみにあらずして行住坐臥執り行ふ所なれば執禮とも云ふ博く學たる所を約かにして其身に引受て今日の行事とす故に博文約禮と云禮は文なれども是を行事に施す時は行となる然は博約の教は文行にして其心術は忠信の二ツなり此四教至易至簡にして知り易く從ひ易く行路の人と雖悟りかたき事に非後世口には論語を誦すれども四教を是高閑に束て新奇の説を設事業を餘所にして高妙深奥の理を講説し聖經にもなき様々の名目科條を立て學者も又

聖經を捨て後儒を信し議論多端にして事業に疎なるもの多し是孔門の教に非る故親製記文にも學問事業不殊其效と載たまふ學者此深意を諭りて孔門の四教に本つき學問事業を一にして盛意に遵奉せざるへけむや

子曰文莫吾猶人也。躬行君子則吾未之有得。

詩書禮樂の文至て博しと雖も人に學て是を知るへき學の力を以て其原委をも窮へし故に學と文とは夫子自ら許す所にして不如丘之好學とも文王既没文不在茲乎とも仰られ此には謙遜して人の如くにも至るへきかと仰らる行は身に備りたる天性の徳を修て忠信を主として行事に施すなれば萬事に應ずる間には人目にも見へさる中に徳を失ふこともあらんかと不盡の畏ありて尤難しとす故に文よ

りも一等の謙辭を加て未之有得と仰らる人をして博學ふへき所は文なれとも行の至て難き事を知て君子の人とならしめ給んとなり是又四教の二ツにして忠信の其中にあるなり

子曰興於詩立於禮成於樂

此章詩書執禮の中に就て詩と禮とを云詩は人情をいふものなれば諷誦吟詠の間自然に興起する所あり章を斷は義を取て其意を活用す切磋琢磨は君徳を頌したる詩なり子貢其詞を取て問答に因て益を得たるの意を興す巧笑倩兮は美人を美めたる詩なり子夏取て禮は後と云意を興す唐棣之華は男女相思ふことなるへし夫子取て未だ思さるの意を興し給ふ左傳等に詩を賦したるも大抵是に同じ皇

朝の歌詞にも戀歌などにも人心を感發すること多く熊澤蕃山は築波山の歌を學問の義に取て其別號とす古より此類の事甚多し古人詩を活用して感發興起することかくの如し興るよりして万物万事人情世態をも觀想すへく人と群居して相和樂すること意に満たざるを怨むことあるも君父に事ふること人と言ふとも政に達すること四方に使して君命を辱めさること皆万物万事人情世態に通して活用を知り固陋偏僻を免るゝに非ればあたはさる事なれば詩を以て人心を興起せしむ後世は初學よりして煩碎瑣屑の事も理窟つめにして様々科目條格を設て人心を拘束し懲戒の意勝ちて勸勉に乏し聖人は勸勉を先として人を鼓舞作興し吟誦諷詠樂愷中より志氣を興起せしむ是聖

人詩の教なり禮は万事の儀則にして百行の准的なり人を
 して過不及の失なく中道を得せしむべき爲に聖人の立置
 れたるものなれば君父に事へ夫婦兄弟朋友の間にも禮に
 由て行ふ時は言説を不待して自然に其道を得て倫理に叶
 ふなり故に禮を以身の行を立るは聖人禮の教なり詩禮の
 二ツは博文中の尤手近くして日用に切なる所なれば伯魚
 に教給ふにも不學詩無以言不學禮無以立との兩言にして
 盡せり樂の本は詩より出舜の言にも詩言志歌永言といふ
 より聲律を生して樂となり禮と相並て互に其及さる所を
 濟ふ禮は上下内外親疎長幼等の辨を正くして混乱せざる
 を旨とす故に禮勝則離とて禮ありて樂なければ和樂親愛
 の情薄く情意相離るゝの失あり依て樂を以て是を濟ひ和

樂の情を生せしめ又樂勝則流とて和樂のみにして禮の整
 莊を得されは万事に辨別なく流蕩するの失あり故に禮を
 以て是を節し樂を以て是を和す禮樂相離るへからず禮を
 云時は樂其中にあり禮樂並云時は二者相對待す四教には
 樂なく此には詩禮樂相並ふ其言各々當る所あるなり孔門
 の教法字句各異なりと雖も其實は皆同歸にして多端に非
 す子罕言利與命與仁。

四教は文行忠信にして雅言は詩書執禮なれば文章は門人
 聞くをを得れども利命仁をば罕に仰らる小人は利に喩れ
 ども利に依て行ふ時は怨多し君子は義に喩て利を後にす
 故に利をは多く語給はず命を不知は君子に非れども其行
 事天道に合なふ時は易きに居て命を俟ち人事を盡す時は

命をは言すして可なり。夫子の教は仁に在りされども仁は廣大にして門人企て及び難きもの多し。故に其人の高下に因りて各々其人の行ひ易き所を是に告げ、行事に就て其人に相應する所の仁に當るよう、に教給ふ。故に仁は言すして行事を以仁に導給ふ。いづれも實事を先して、言論を後にす。詩書執禮、文行忠信みな仁の實事なれば、是を雅言するは仁を教るの道なれども、命と仁ともまた雅言するを待さるなり。

顔淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮。欲罷不能、既竭吾才、如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已。

博文約禮の義前に論す。孔門の教、顔子の大賢と雖も、此二者

に過さるゝ諸弟子に同じ。但他人は同じく學ふと雖も、己か才を竭すとあたはず。只顔子のみ進むを見て止るを見ず。夫子の言に於て悦さることなく、一を聞て十を知り、以て發するに足り。三月仁に違はさるに至る。是自ら己か才を竭すなり。故に夫子も顔子のみ學を好と稱せらる。後の學者、顔子を准的として、博約の教に従ひ、己か生れつきたる程の才を殘る所なく、其學に用ひ、竭すに至るべきなり。

唐棣之華、偏其反而。豈不爾思、室是遠而。子曰、未之思也。夫何遠之有。

論語の書學而より、郷黨までを上篇とし、先進以下を下篇とすと云る説さもあるへし。上篇の終は郷黨なれども、郷黨は夫子の行狀にして、他事に及はず。他事を博く論したるは子

罕を以て上篇の終とす是に依て此章學而の首章と首尾を相爲す學而の首章は學習の説ひより君子となるまでの事を論じ此章は共學適道の章を受て自暴自棄して學て道に適の志薄きものを云學習の説ふへきを知らずして君子となるてあたはさるものなり思ふ所の人を實に厚く思はんには道の遠近によるへからず路の遠きなど云は思ふての至らざるなり道を學ふても再有か非不説子之道力不足也雍と云るか如きをは夫子も力不足者中道廢今女畫と戒め給ふ顔淵をは見其進也未見其止也と稱せられ互郷の童子をは與其進也不與其退也と仰られ又雖覆一簣進吾往也とも仰らる學に進んとするの志厚からんには道を求るても難からざる故仁遠乎哉我欲仁斯仁至矣と仰られて仁を得

んと欲せは志の厚薄によるへしとの義を論じ給ふ道に志して篤く思入たらんには學習の説ひよりして君子にならんとも難からず只其思ひ入ることの厚薄によるのみ志なき者は聖人の教と雖も是を諭すへからず故に不曰如之何如之何者吾未如之何也已矣と仰られて已か心に問んと欲するの志なき者は聖人と雖もいかんともし難きとなり故に此章を此篇の終に置いて志の厚薄によるへしとの義を以て警とし學而章と相首尾す學者反復玩味して深意を論るへきなり

子曰先進於禮樂野人也後進於禮樂君子也如用之則吾從先進。夫子禮學を教給ふに先輩後輩文質異にして野人君子の別あり若し其人を用んには

太田氏の説に従ふ

質にして野人の如きもの

を用へしと仰らるゝも禮樂の本を失ひ末に流るゝを戒め給ふの意なり此章論語下篇の首にして禮樂を論す夫子の教は禮樂の實事に在て性命等の議論を先とせさるゝ見つへきなり故に人材を成就するにも下文の如く德行言語政事文學人々の所長ありて一様ならず又後章にも闇々行々侃々愚魯辟彊各其趣を異にす後世一律を以教とするものと異なり

子路使子羔爲費宰子曰賊夫人之子子路曰有民人焉有社稷焉何必讀書然後爲學子曰是故惡夫佞者

讀書は詩書執禮中の一なり書に古今の治亂興廢人の善惡邪正より禮樂制度政教禁令悉く備れり書を讀されは古今の治體に暗く胸中に定見なく一時の俗見を是なりとし

て季世の弊風を看破ることあたはず私智を以て武斷するのみなれば一時に行ふへくとも永世の害を貽すこと多し故に書を讀されは政をすること能はずと仰らる是を以て古の讀書は講釋を巧にし或は博覽に誇るの類と同じからざることを悟るへきなり

子路曾皙再有公西華侍坐子曰以吾一日長乎爾母吾以也居則曰不吾知也如或知爾則何以哉子路率爾而對曰千乘之國攝乎大國之間加之以師旅因之以饑饉由也爲之比及三年可使有勇且知方也夫子哂之求爾何如對曰方六七十如五六十求也爲之比及三年可使足民如其禮樂以俟君子赤爾何如對曰非曰能之願學焉宗廟之事如會同端章甫願爲小相焉點爾何如鼓瑟希鏗爾舍瑟而作對曰異乎三子者之撰子曰何傷乎亦各言其志也曰

莫春者春服既成冠者五六人童子六七人浴乎沂風乎舞雩詠而歸夫子喟然歎曰吾與點三子者出曾皙後曾皙曰夫三子者之言何如子曰亦各言其志也已矣曰夫子何哂由也曰爲國以禮其言不讓是故哂之唯求則非邦也與安見方六七十如五六十而非邦也者唯赤則非邦也與宗廟會同非諸侯而何赤也爲之小孰能爲之大

孔門の學仁を本とす仁者は己を修め人を治む學て己を修め人にも知られて人を治んと欲すは仁者の志なり人の不知を愠するには至らされとも不知吾など云ことは有爲の志厚き故なりされとも不患人之不已知患其不能と云る如くなれば是を知るものありとも其事業をなし得さらんは素志に負くことなる故如或知爾則何以哉と問て其所能

を試み給ふ子路冉有公西華か對る所何れも其才の長する所にして實事に施すべく空言に非る故其言ふ所を許し給ふ曾皙の志は禮樂を以て天下を治め太平を致して教化行れ學中の子弟打つれて春風和氣を樂むの氣象有て其志大なる故別に論せしものある故此に其大意を云ふのみ三子は實材にして各々志の如くに行ひ得へし曾皙は狂者にして其志大なれとも志の如くに行ふこと能はずされとも志す所は夫子の素志と暗合したる故是に與みし給ふ孔門の教は其所長に隨て有用の實材を成就し狂簡をは其志を養ひ是を裁正して實材に導給ふ後世一樣の教條を立て誰もくも同じかたに押はめんとするとは大に異なり

顏淵問仁子曰克己復禮爲仁一日克己復禮天下歸仁焉爲仁由

已而由人乎哉。顔淵曰。請問其目。子曰。非禮勿視。非禮勿聽。非禮勿言。非禮勿動。顔淵曰。回雖不敏。請事斯語矣。

孔子の教は仁なれども禮は万事の中を酌て仁を行ふの儀則なれば禮を蹈行ふ時は即ち仁なり故に顔淵も約我以禮と云ふ仲弓に對る所の見賓承祭も敬にして即ち禮なり。孔子とも請事斯語矣と云たるも其道理を知りたるのみにして實事に施されば無益なる故斯語を實事に施し行んとは云たるなり。二子の徳行を以稱せられしも仁の大徳を行事に施し天下に及ぼすへきを以てなり。世俗の小廉曲謹を指て徳行と云か如きに非事斯語の一言に就ても孔門の理を云はすして實事を先にすると見つへきなり。

子曰。博學於文。約之以禮。亦可以弗畔矣夫。

夫子博約の教は前に論するか如し。是夫子の自ら仰られし所にして顔子もまた是を云ふ。後世孔顔を信せずして理を云ふことを先にするは何ぞや。

曾子曰。君子以文會友。以友輔仁。

朋友の集會にも詩書禮樂の文を以て相共に講習す。是仁を行ふことを修行するなれば朋友の講習を以て仁を輔るなり。

子曰。誦詩三百。授之以政。不達。使於四方。不能專對。雖多亦奚以爲。前にも論するか如く詩の教は人情世態を審にするにあり。是を活用する時は政事に施すとも時宜に叶ふへし四方に使して應對を一人にて引受辭命も事に臨て專に決斷し君命を辱めさるとも人情世態に通せされは能はず。詩を誦す

る程なれば是を活用して實事に施行するに非れば多く學たりとも何の用にも立さるなり

子曰君子上達小人下達

上達とは學て君子の道に進むを云下達とは學て君子の道に遠さかるを云君子は徳行道藝兼備りて己を脩め人を治るの道に通達す是上達なり小人は徳行道藝もなく脩己治人の道にも志ささす一技一藝の士となる是下達なり藝も道を離れて技藝のみなるは曲藝にして君子の藝に非故に樂記にも徳成而上藝成而下と云藝のみ學ひては學成に隨ひいよく下りて下等の人となるなり夫子は下學而上達と仰らる博文約禮は下學にしてこの下學の功によりて欲仁斯仁至と云に至るは君子の上達なり樊遲か稼圃を學ぶ

の類是下達なり故に夫子も小人哉と仰らる雖小道心有可觀者焉致遠恐泥是以君子不爲也と云るも小道に泥む時は下達するを云なり下達の甚しきは羿か射の如きに至る尤戒へき事なり今時武藝を習か如きも君子忠孝の道に志して戦場の用を心掛るは上達とも云へし世渡りの藝人の如く演場の勝負のみ競ふは曲藝にして下達なり詩歌文章書畫の類も脩己治人の道を講究し餘暇を以雅懷を遣り又は經世の業聖賢の道を論するは君子の上達なり才藝のみに流るゝは曲藝にして小人の下達なり

子曰古之學者爲己今之學者爲人

爲己とは文行忠信を學ひ得て己か身を仁人君子となさんとするなり爲人とは外見を飾りて人に稱譽せられんを

求るなり當今書を讀んにも脩己治人の道を會得して實行に施んとして世間の毀譽に心なきは爲己なり爲人ものは外聞のみを心とし脩己治人は餘所にして書を講ずるには本文の意を解し得ざる事あるをも口先にて巧に言廻し詩文を作るとも識見にも情意にも本つかす筆の先きにて纖巧を競ひ巧言如簧など云るか如く其流弊は闒然媚世の郷原に異ならず其躬行に至ては非刺すへき事もなく忠信廉潔に似て眞の郷原となり徳の賊となる皆爲人より出るをなる故孔門の學者は爲人の卑劣心なきように教給ふなり子曰莫我知也夫子貢曰何爲其莫知子也子曰不怨天不尤人下學而上達知我者其天乎

孔門の學は博文約禮にして詩書執禮は雅言し給ふ所なり

詩書は義の府にして脩己治人の道備る禮樂は徳の則にして百行の儀則經世の法備る初學よりして博約の業を受て講習するは下學なり脩己治人の道を盡して百行に施し經世の法を活用するに至ては仁者の事にして上達する所なり聖人と雖も初學より直に上達すへからず博約の功を積て上達に至るとは夫子の自ら稱し給ふ所なり後世朱仲晦の如きも儀禮經傳通解を著したるは博約の志あるなり文集に就て封事等の文を見る時は天下を憂るの志も見つへし近時濂洛の學と稱するものは是等の事をは不知して初學といへとも下學の工夫はなく上達の眞似をして理氣性命を談し實事に疎なるは洙泗の學を不知のみならず濂洛にも背くと云へし

子曰賜也女以予爲多學而識之者與對曰然非與曰非也予一以貫之

多學而識之は博文にして孔門の教なりされとも博文のみにして歸宿する所の要を知らされは散漫して統紀なきの患あり故に子貢に告るに一貫の義を以て博文の教と雖も博物に止らず多識する所を仁の一字を以て貫穿する時ハ多識する所皆一纏になりて仁を行ふの用をなす是孔門博文を實用に施すの教なり

顔淵問爲邦子曰行夏之時乘殷之輅服周之冕樂則韶舞放鄭聲遠佞人鄭聲淫佞人殆

是博文の教を變通活用して當時に施行するなり前代の禮樂制度を學ひ得たらんには是を斟酌損益して實事に用ゆ

へき所を知るは即ち温故知新にして孔門の教法後世學問事業を二にするものと同からさるなり

子曰人能弘道非道弘人

弘道の義間話中に論す道を學たりとも世に弘めされは一人の私有にして天下の大道に非孔門の學は善あれば是を天下と共にす區々として自好くするのみに非るなり

子曰有教無類

性相近くして習との相遠きなれはいかなる人も學て善に進の志あらは教へからさるものなし其類には拘らず孔門人を取の廣きとかくの如し

陳亢問於伯魚曰子亦有異聞乎對曰未也嘗獨立鯉趨而過庭曰學詩乎對曰未也不學詩無以言鯉退而學詩他日又獨立鯉趨而

過庭曰。學禮乎。對曰。未也。不學禮無以立。經退而學禮。聞斯二者。陳亢退而喜曰。問一得三。聞詩聞禮。又聞君子之遠其子也。

興於詩立於禮は孔門の教にして門弟子を教るにもまた父子の間にしても此二ツを以て教とす里巷歌謠より宗廟朝廷の雅頌に至り人情世態に通し坐作進退より經世の用に至り時措の宜きを制す皆詩禮の教に非るゝなし故に又人而不學周南呂南其猶正牆面而立也與と仰らる二南は周代天下を風化するの本なり周代に在て當代風化の原を不知は目前の事も見さるか如しとの義なり其次章には禮樂の本意玉帛鐘鼓に非ることを仰らる是また詩禮の教なり

子曰。性相近也。習相遠也。

子曰。唯上知與下愚不移。

孔門の教は實事を先として性と天道とは門人聞くことを得ず論語中性を説給るは此一章のみなり生れのまゝに備りて自然に固有する心を性と云人々生れ付たる心は多くは相似て遠からざるものなれば相近と云又人之生也直とも又斯民也三代之所以直道而行也とも云て生れたるまゝなれば善を善とし惡を惡とする心は誰も同くしておのつから曲りひつみたることはなきなりされとも其の習はしによりて善に習ふものは善士となり惡に習ふものは惡人となり義に習ふ時は君子となり利に習ふ時は小人となり大善大惡甚相遠くなるは皆其習はしによるなり直き心を失ひ惡人となりて惡を喜ひ善を惡み相讐敵するに至る故に罔之生也幸而免と云直なるへきを罔て是を枉け善を惡

み悪を喜ぶは人の好むべきを惡み惡むべきを好むにして
大學にも是謂拂人之性蓄必逮夫身と云る道理なるをその
人蓄に免るゝは幸なり然は惡を好むは不直にして人の性
に非善を好むこと其直なる所にして即ち天性なれば中庸
にも率性之謂道と云善を好むの性に率ひ五典を惇くする
時は即ち善道となるも性相近き故なり是論語中に性善の
字はなけれども性善の義は盡く備りて論孟の説異同ある
となし然るに後世本然の性氣質の性とて性に二ツありと
云ふは聖賢の書に曾て無きとなり性は一ツのみにして二
ツあるとなし大禹謨に人心道心と云ふあれとも大禹謨は
後世の偽作にして人心道心の語荀子より剽竊したれとも
荀子には道經曰とあれは本は老莊の徒の書を引たるもの

にして聖賢の書に非れば取るに足らず此外には心性二ツ
ありといふとは聖賢の書に一句もなきとなり夫子は性相
近と仰られたるなれば只相近きものと心得て他説を求め
ず聖言のみを信して性は誰も相近けれども習によりて遠
くなること云ふを體認し夫子四教の實事を習熟して聖賢
の道を學ひ得上達して君子の事業を成し得たらんには世
俗の習に囿せられ庸人鄙夫となりて身を終るものとは毫
釐千里の差にして大に相遠かるへし故に性を論するより
は習を慎むを先とすへきなり

子曰小子何莫學夫詩々可以興可以觀可以群可以怨邇之事父
遠之事君多識於鳥獸艸木之名

此章詩を學ぶの法を盡せり詩に興るとは前に粗論したり

吟誦諷詠の間に興起惑發して全篇の意は勿論或は斷章取義是を活用する意を得る時は万事万物人情世態を通觀して其情實に通達するとも皆詩の活用によるなりかくの如く通達して詩人從容不迫の意を得る時は人と羣居して相共に和樂するも詩の用なり又人事の是非善惡によりて是を怨むとあるも人情の免れざる所なれとも人を怨む中にも小弁の怨凱風の不怨など又舜の怨慕などの如く人情に叶て其宜きを得ることと詩中に教の寓する所なり又父に事へて孝養を盡すとも君に事へて忠勤を致すとも詩の教によりて人事に通達するを本とするなりかくの如く人事の宜きを得たる上にて其餘りには鳥獸草木等の名をも識り得て日用に益あり是孔門に詩を教ふるの法なり後世は詩

を以勸懲褒貶の義とし從容不迫の意を失て理窟詰めになり人情迫切にして詩人溫厚和平の氣象に非是孔門の詩の教になきとなり

子謂伯魚曰女爲周南召南矣乎人而不爲周南召南其猶正牆面而立也與

子曰禮云禮云玉帛云乎哉樂云樂云鐘鼓云乎哉

周南召南の二前に見へたり此に兩章並へ記したるも孔門詩と禮樂との教にして博文の事なり

子曰予欲無言子貢曰子如不言則小子何述焉子曰天何言哉四時行焉百物生焉天何言哉

孔門の教は實事に在て言論に在らず文行忠信博文約禮詩書執禮等皆實事を以是に教へ門人をして講究習熟して其

意義を默識自得せしめ其の憤悱を待て是を啓發す天の不言して陰陽運行寒暑往來する間に百物各々其氣を受けて滋生するか如く博約の業を修る間に各々其長する所に隨て徳を成し材を達し一々に告語指授するに及はず是夫子は門人の告語指授のみを待て學て思はず耳學の人とならんとを恐れて警戒せらるゝの意なり下章に孺悲に疾を以辭し瑟を取り歌て聞しめ給ひしも不屑の教誨にして即ち不言の中に教あるを見つへし故に以我爲隱乎吾無行而不與二三子者とも仰られて言説を後にして隱すとあるか如くに見ゆれとも行事を先にして是に示さる夫子平日門弟子と共に行ひ給ふ所を見て發明自得する時はその開悟するも其説を聞たるより深し是亦此章と同意なり

子夏曰雖小道必有可觀者焉致遠恐泥是以君子不爲也

聖人の道は大道なり故に君子不可小知而可大受也と云て小節細目を略して大體大義に心を用ふ小道とは曲技雜藝或は一草一木の理を窮るの類瑣末の事に心を用るなり小道なりとも其道に立入て見る時はそれ／＼の一理ありて面白く見ゆるともあれとも曲途旁經を行き迷て泥中に陥るか如く深入しては益／＼大道に出ると難し故に君子は小道を捨て専ら大道を學ふなり堯舞之知而不偏物急先務也盡心上とも云へは大道を先務として小道まで徧きことを求へからず又大徳不踰閑小徳出入可也とも云て是又小節をは畧すとも大徳は閑防する所の規矩を守て蹈踰すことなきも皆大小の辨を見分けて大道に専ら心を用るの意なり

子夏曰日知其所亡月無忘其所能可謂好學也已矣

日知所亡は學の功にして月無忘其所能は時習の效也此二ツを兼るに非れば學を好むと云難し

子夏曰博學而篤志切問而近思仁在其中矣

博く文を學て學に志すと篤く疑を問には切實にして其審なるを極め問之弗知弗措也と云るか如くにすその上にも能近取譬と云るか如く至近なる己か身に體認して問たる事を深思す孔門の學は仁を求るに在此章の四言は仁を求るの措梯なれば是を報服する時は言論を不待この實事を行ふ中よりして自ら仁となるなり

子游曰子夏之門人小子當洒掃應對進退則可矣抑末也本之則

無如之何子夏聞之曰噫言游過矣君子之道孰先傳焉孰後倦焉譬諸艸木區以別矣君子之道焉可誣也有始有卒者其唯聖人乎

子游子夏は皆孔門にて文學に長したる人なり子游の見は禮の本を論して末節を略するにあり子夏は謹勅の人にして門人を教るにも洒掃應對進退をも綿密に教へたるを子游は末にして本なしと云子夏は道を傳るには本末並へ舉て前後するとなし學ふもの、材によりて草木の區別するか如く其本を得るものあり洒掃應對のみにして一箇の謹慎の人となるもあり教るものは引而不發躍如也中道而立といへるか如く本末兼備て中道に立て門人の表的となり能者は是に従て大本大道を得へし不能者をも誣て大本を得るやうにはなり難しと云兩人皆孔門に在て聖人に親炙

したれどもかやうに異同あるを聖人の教は簡易にして人々をして其長する所の材を成就せしむ後世一律を以窮窟に教て人々を皆一樣にするものとは大に異なり

衛公孫朝問於子貢曰仲尼焉學子貢曰文武之道未墜於地在人賢者識其大者不賢者識其小者莫不有文武之道焉夫子焉不學而亦何常師之有

夫子堯舜を祖述し文武を憲章す文武は周代の祖宗其道尙人に在て人の知る所なり其中に賢者は其大體大義を心得不賢者と雖とも細目小節をは各々心得て居るをなれば夫子の學給ふにも衆人の中に賢者に就ては大體大義を學ひ不賢者には細目小節を學ひ是を集て大成し給ふ文武の道は禮樂制度にあり周監於二代郁々乎文哉吾從周と仰られ

しは即ち是なり是を學給ふは即ち夫子博文の學なり是皆實事を學て脩己治人の用とす後世高妙精微を以て蘊奧とするものと異なり故に此篇の終に子貢の語を載て夫子之得邦家者所謂立之斯立道之斯行綏之斯來動之斯和其生也榮其死也哀と云て皆其事業に施し給ふ所を以て稱せしなり後世徳容氣象のみを以て聖人を稱するは聖人を知るに非るなり

子曰不知命無以爲君子也不知禮無以立也不知言無以知人也論語の書は人をして學て君子たらしむるの書なれハ篇の終に君子の徳を述君子は命を知て是に安んず故に學而の首章に人不知而不愠不亦君子乎と云も君子命に安するなり夫子邦家を得給は、子貢か言たる如く徳化行るへきて

なれども位を不得は命なれば五十而知天命と仰らる故に
篇末に至て知命君子のみを載す禮は博文の一なれども万
事の儀則にして日用常行の事一も禮に由らされは君父に
事へ妻子を養ひ人と交るにも儀則なく何事も一時の私意
に出て苟且にして道に背くと多く一日も世に立へからず
國を治るには齊くするに禮を以てし孝は生に事るも葬祭
も禮を以てす君臣を使ひ臣君に事るに禮を以てするの類
皆禮に立の事にして恭慎勇直なれども禮なければ勞蕙亂
絞するの類は無以立也これによりて孔門には禮に立つ實
事を以て教とす故に論語下篇の首にも禮樂を言ひ此に至
て知禮を以て是を結ふなり知言とは人の言を聞て是非得
失善惡邪正を詳に辨明するなり是道義に明にして聖人の

大道を以て權衡とするに非れば其是非を見分る事も私意
に出て准則なし故に大道を明に知て其人言ふ所の是非得
失善惡邪正を知るに非れば其人の賢否を知ることあたは
ず人を知らされは朋遠方より來るとも交りを選択ふことあ
たはず輔仁の益なく庶官に其人を得ずして國家を治ること
あたはず故に論語の終に至て知言知人を以てこれを結
ふ孟子も知言養氣を以て自ら任とす聖人の大道に明なら
されは言を知て邪説を息め誠行を拒くことあたはずして
聖人の大道溷晦す知言を以て篇を終ること深意のある所
なり此章命を知て君子となり禮を知て其行を立て言を知
て人の賢否を知り大道を明にし天下後世の摸範となるこ
と此篇を編むの深意なるへし右論語中教學に關るものを

抄出するに一として實事實行に非るはなく後世の如く高妙の説を設て理窟に涉ること一章一句もあらす是を以て孔門教學の法後世と異なることを辨知すへきなり

洙泗教學解跋

仲尼不得志於當時。木鐸於萬世。誨人不倦。成德達材。多士濟々。而其教學之法。備於論語一書。欲觀聖門當日之舊。莫要焉。我先公創弘道之館。作記論教學之要。然以記文之體。不能委曲。命安等以俚語述其餘意。安著退食間話。以塞其責。而又謂洙泗之學。源遠末分。使後輩溯其源。宜專就論語。以詳教學之法。迺抄錄書中語。而畧解之。以附間話後。遼東之豕。雖不足與成人長者論。聊以資童蒙求我之說話云。

明治廿五年七月廿四日印刷
全 年九月十五日出版

著述者

茨城縣士族
故人會

澤

恒

藏

編輯者

茨城縣士族
寺

門

謹

發行者

川

崎

又

次

郎

印刷者

平

松

寬

三

發兌

國

光

社

麴町區平河町五丁目十六番地寄留

麴町區隼町二十二番地寄留

